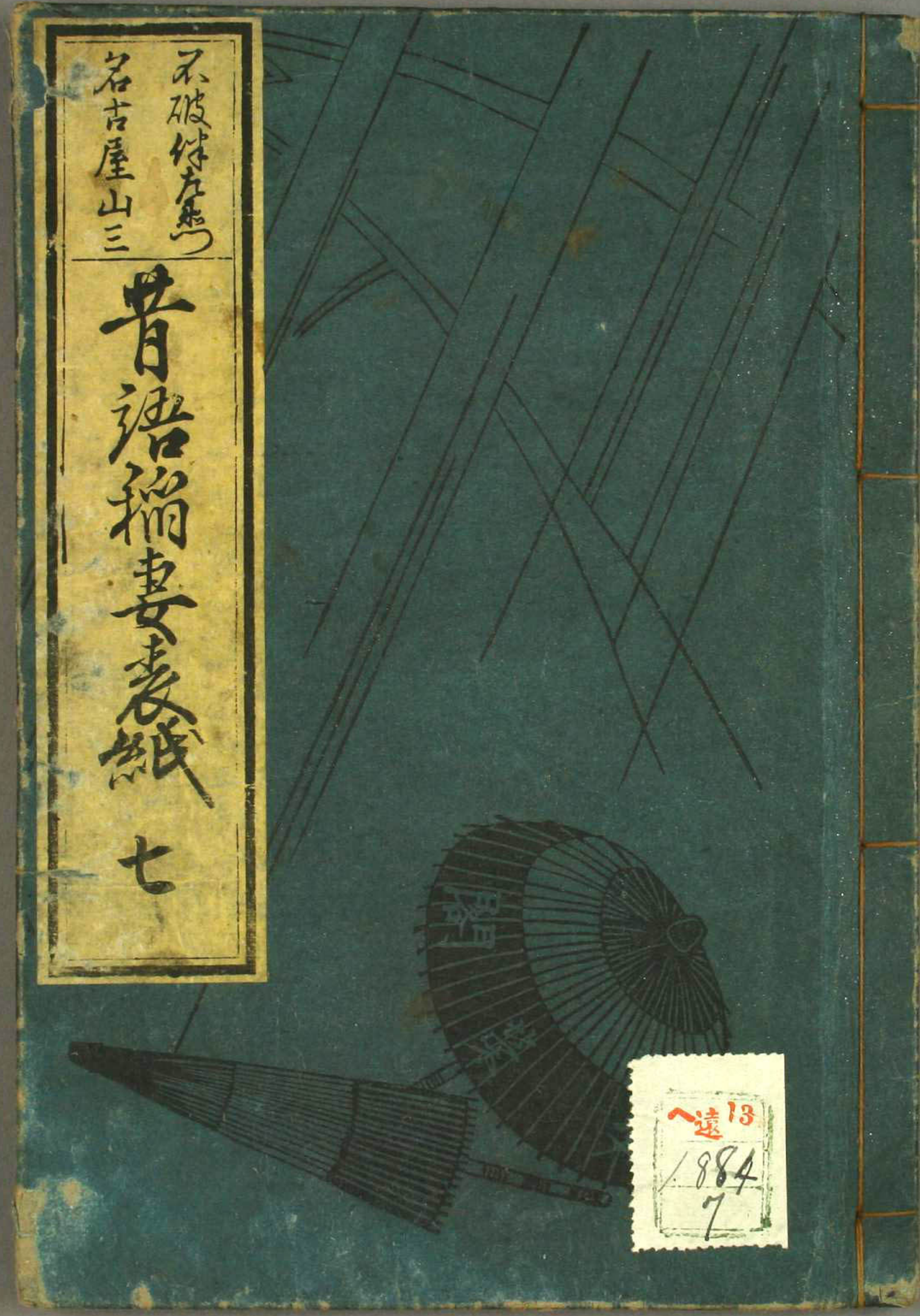
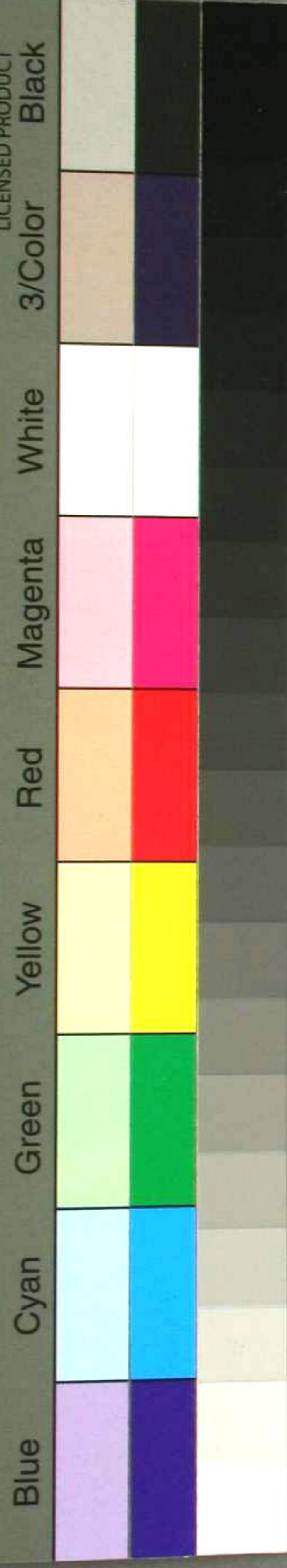


Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT



不破屋山三
名古屋山三

昔語箱妻表紙
七

遠13
884
7



門 遠 18
884
7

本清

今も漸死つた形勢なり。嘉門は体と益を
 堪忍つた人の覆面して面へ志うと云ふはれども。平々たる
 侍の如く寒とつとつた体。つらぬ何ぞもひつめたる夏あんと古
 と巻てを居たりける。湯も伊尹と得。周も太公望とめらひたるも大
 将たる人賢と尊び敬志の厚子があまなり。總て国家を治るの要賢臣
 小あつて賢臣と得。小礼讓とあつてはざれば出て仕へど。禄を施し金
 帛をぬき招くも。賢士とそふ志ある人あは仕へる事あり。さや相その
 時言加川舟のそはちうくし。川の雪中の旅人の何者も小やん。思ふも氣
 の毒の形勢あり。おん心小あつるはさる者も。理とのづておん故あるは
 某出ておひりしやさんやとつた。おん心小あつるはさる者も。理とのづておん故あるは
 留主小雨度まで来りて。さあぐのたの。夏我心小あつるはさる者も。理とのづておん故あるは

夏我心小あつるはさる者も。理とのづておん故あるは

夏我心小あつるはさる者も。理とのづておん故あるは

うけがらなげに様もわく飯つらう。又今日も来りてそちふあひなご望
りれども。仕官ささる心あけねば。どやく人ふあひさぬ小志くならうと
かねてふひを他行とりのりさかへんとさる小志うらば飯宅を待んとて
あのごとく寒気小苦しむたけ者。は方の心も察せど長居さるうけ
人のしとさちとあひさだにふあひさだに若者小除じて追飯さふ志
といひて若者さちうづけ。俄小詞をのりていひけら。汝さねど奴僕とも
おめんとといひつら詞ふよとを申しつら又あさの雪中の侍と汝が辨
舌とみそおひつせ。いふいふも嘉門の他出せしといひて是非とも
つとせといひつらね。若者うけあひさ。某店存公の手柄もいふおん
手ふあさる馬麻者とおひつとてえせやえんといひて外のかうふ立いで
ゆよく旅人おんすのりまを待たうとも。あはじ嘉門の飯宅のなと何の時こ

えうさるね。若日もくれあ難儀のうへの雅義やうん。とくつらうと
いふといひつら手とさる。ひれたんとせ。親とて仰天。貴君の
由理之助勝基公ああどや。はあん姿へ何あ急とと打驚つ。奉礼以
行ひ。官領職のおん才を以て一人の従者をも召具せられど。かろじと
御容体のぶか。ささと相のづる。勝基の人の桂之助国知さるられ
ども。一言の答る。唯拳を握り歯をのりて寒気小たぐら様
子さる。桂之助さるづら。某おん館義政公をの御気色を損。瀆名入
道殿の御内意ふらして父の勸気とらけ。牙をねば。おん詞をたな
りぬも理あり。かろ大雪といひあひさ。自は家ふのりさふと家
ろふふ。嘉門を軍師小召抱あひん結構に存むらり。某今日も山
中ふらり。心と尽して嘉門小近づきぬも別意ふあふ。曾ておん館

名古屋巻之五十一

一

嘉嘉門編なる。武道徒然草とのみ昏を。御懇望ありと云ふも。若く
ふく秘して他見をあるさぶど。若く命を以て召よる時、其の昏
を焼て身とかくさんと必定向うとて。それこそそのおん沙汰もあ
ざりさ。某偶ふるをさるひひじりたると。嘉嘉門に誠心をとんせ。かの
昏を得ておん館ふたてまつり。そのは微功をわして父の勳を赦
免の御内意を願ふらん為やりとわさると。勝基尻目ふかけ。その
身放佚無慙あして。おん館の御不貞とかりう。父の勳気とうけ
たる者。おん館に討ちしとのさるふか。桂之助けふ理とその身の
料と後悔し。ばうら嘉嘉門親子に勝基ぶのと。おあけのひと味方ふ
つけ。せめその功ふたてと。心のうちふさひひつ。おあわれ内ふ入づく
老母の前ふひびきあづく。老母もろより。かの馬床者いひきあづく。理

いつて。おん館も汝の家外なる不調法のをさるうといひひきあて。此
家不足とせめ。嘉嘉門と師とたの。兵法の道とらとらたぬんこと。いぞ
うおるふたてと。おん館に奴僕と召仕ふた。そのは詰めあて。戒とせ。不存
公とらものぞといひて。一つの服紗包ととて。さんふ打擲とといひも桂
之助路をりも怒るのりや。某が宿願成就とらとら。いりある百愛目ふ
あふも。は家といひぐる心ふあ。ごお気ふか。わぬぬ。まあらとて。たとへ打殺
さらうともせんまを。ばうらのか情あ。かの雪中の侍ふ。嘉嘉門の
おん引合せとせられ。夏の子細とおん同あ。のまじと。簀子のうぶ額を
つけ。涙をぐりふね。ごう形勢。誠小哀の姿あて。おんひ入て。ごえんた。たけ
かろ折も納戸のなだてと。ささといひうたて。立出る骨柄。白糸緘。銀の
鏢緘。たる腹巻の上。萌黄錦の陳羽織を著。青鈍の大口ら。た

短慮卒忽の大將。又寛仁大度の大將。をどくをどく御心成とうふひ
 一入のゆい主よりさせざる心なり。我子なる一方の大將。はして不足
 嘉門と一生深山の埋木谷の果守と朽果させん。母がとて御
 を云のさせん。と存つる度。心もあはね不礼のこと。は中せし。も
 清堪忍のそバせし。心のうちあはのさる。勿体なく。只感涙をこ
 がして。居ゆひわとのひて。老の涙をまると。老母又桂之助。ひひ
 さねわど途中。あておん目おかりし時。唯人あふ。いと。ひひ。され
 わど勝基公。おん物語り。とののけ。あてうけ。たぬれば。果して
 君あておひけ。一度も。目ええ。さねれば。妾とおん。知あ
 けじく。妾も又おん。教と。えま。ぬれども。今ハ何と。つ。み。に。君の
 元来。妾腹。あて。その。後。実母ハ。妾が。娘。嘉門。の。為。お。好。あて。君の。産

をりて。と。ご。ふ。身。ま。う。こ。ゆ。ひ。ぬ。先。奥。方。ハ。賢。女。あ。て。お。い。せ。お。ま。い。も。城。の。い。ら
 なく。奥。方。の。御。正。腹。と。御。披。露。あ。い。じ。が。平。人。の。身。あ。て。や。さ。い。君。の。妾。が。為。お
 孫。あ。て。ご。も。腹。ハ。と。ち。り。の。つ。の。の。あ。ら。ね。ば。妾。が。為。お。正。一。く。主。君。の。と
 かつ。その。あ。も。奴。僕。と。い。び。打。擲。せ。し。大。罪。あ。ら。ね。ども。それ。あ。い。と。さ。く。縁。故
 の。い。色。を。御。覧。し。と。い。は。し。は。し。と。は。出。と。桂。之。助。ハ。始。て。実。母。の。母。の。妾
 を。知。り。て。打。驚。頓。小。包。と。ひ。き。さ。え。お。短。冊。ハ。一。ひ。の。短。冊。あ。ら。と。ま。あ。げ。ら。ぬ。
 咲。向。入。柳。津。の。川。乃。花。さ。う。ら。う。ら。う。の。夜。の。つ。け。も。う。の。い。と
 こ。の。歌。を。ま。せ。せ。と。桂。之。助。眉。と。あ。ら。め。て。は。半。跡。ハ。え。お。あ。え。あり。と。と。老
 母。小。膝。と。さ。ら。め。その。為。家。卿。の。詠。歌。は。て。夫。木。集。小。入。たる。歌。わ。ら。が
 五。の。つ。祖。父。君。佐。木。盛。貞。公。御。在。京。の。折。か。ら。妾。が。夫。梅。津。兵。衛
 北。野。の。社。人。あ。て。あ。い。し。時。御。連。歌。の。つ。を。お。い。え。筆。と。と。め。て。あ。ら。り

北野の社人あてあはし時御連歌のつを

一短冊あり。その短冊の箱を以て打擲仕りし。とちちち祖父君の
 おん拳とごさされ君がられまごの御不行跡を戒むの同然之志も
 小君おん怒のけりひも又えむいごと妻が打擲となく志のびあふ身体
 深く先非を悔あひ。武道はれく草を得て御勳気おん口びの
 種とはむらん御心底あぐりねておんいごとく胸さくらむら悲れ
 とるせやとほじと涙とかくせ老が心と御推量ごされじ子も
 孫のつらねへ世の人の心ぞし平人の兒有る。祖母と孫と名告あひ
 娘がつごころうく。片時も傍とをるごはれ小君臣とるごころい
 いひなきごころのつらねるれも心ふらふのほどしとひて悲歎お袖をひじ
 けと良あると涙をぬぐひ。小嘉門いりふら秘唇を惜まると君ふ
 とそまわれとひふあぞ嘉門とるえひとて。の書を取出して桂之助ふ

多へり老母又勝基おむる御覧のごとく桂之助ごの今いひの志を
 あぐらあふられおん館の御前あるごころをひとふ願き
 こいふ桂之助の秘唇と勝基お渡し誓首俯伏してともふらねと
 願けり勝基お同あひつれておん館御懇望のひ叙書をなごの
 国知ごの大功あるねば御前をよまごころをほておて飯国とごり
 持ぐごのさあつ。三人ひじくあふこと恨り。お嘉門勝基ふ
 ひひ先年彗星あられたる刺星のつら蒼ふ黄とあひたるごを北維
 て婦女權を奪大乱の起るごころを考たるを語けと勝基堂
 をあてその先見と感。義政公の北の臺香樹院殿の若君と濱
 各入道お相托してあふたご今出川殿の勝基を執權じて武持
 たるんこととるれ天下ニふりて。巳小大乱の起るご時節ある

夏どりのめづりけしむ。嘉嘉門又先年濱名が招きふ忘せしむ。岩坂
 猪之八尋教人をおこりて。あちふ山ふゆとをのけしたる夏をわらてあふ
 権兵衛の夏を論。嘉嘉門嘉山小住常平千早の城路をうて楠氏の
 奥妙を感る夏をうと物語ける。嘉嘉門のうらむひのらさるるる
 官領職のおんがふては山中小唯ひとて往来しむ。若濱名方の者
 ども因知も多勢とめてさるるる。あふやん君子の危をふ
 ちうづむむとつり。軍慮のわとうけたるを度ゆと詰問。勝基莞
 尔と打笑さる時の備さふありとのり。懐を探り、蹄笛をこり出で
 吹をあつた。忽、腹巻小臂、手、膝、指をらびく。あつて葉笠をうち
 着たり。荒武者ども。その木蔭か。その岩かげよりあつた。れ出で。數十人
 馳集り。杖とくまをたる馬を引出して。却飯館。こり。あふ。嘉嘉門。あつら

あつらして感嘆し。それのあつら。韓信がらあつた。虚無の謀計。兵を
 むして其理。さるるる。と称義の折しも。以前の。手負熊。いふふ
 ては。処へ。走り。来る。を。荒武者。ども。あつた。て。手槍。を。さる。て。己。あつた。殺
 さん。と。ほ。る。を。勝基。え。あつた。や。れ。ま。て。ま。と。と。声。あつた。て。あつた。あつた。夫。六。韃
 を。考。る。ふ。文。王。太。公。望。を。得。る。時。止。して。非。熊。の。つ。と。我。今。已。ふ。当。世
 の。品。尚。を。得。て。い。う。あ。つた。熊。を。欲。せん。マ。无。益。の。殺。生。好。む。ば。う。と。う。と。う。
 放。や。れ。と。あ。つた。を。け。れ。ば。荒。武。者。ども。呀。こ。こ。ら。つ。て。放。ち。け。り。勝。基。桂。之
 助。あ。つた。ひ。和。殿。今。あ。つた。り。世。と。考。の。ひ。飯。国。の。時。節。を。ま。ら。れ。は。老。母
 は。あ。つた。ら。く。は。家。あ。つた。れ。あ。つた。て。あ。つた。ひ。の。乗。物。と。い。て。あ。つた。ら。は。嘉。嘉。門
 は。今。さ。ら。く。ふ。も。あ。つた。ひ。あ。つた。ん。幸。雪。も。あ。つた。ら。あ。つた。の。あ。つた。ひ。て。馬。あ。つた。せ
 て。乗。あ。つた。ら。嘉。嘉。門。へ。馬。の。左。り。あ。つた。ら。あ。つた。大。勢。の。荒。武。者。ども。列。を。た。ら

して前後をかみ。ゆりのゆる雪成踏分て。林麻を介ていそだゆく。
老母の嘉門がゆ死門出とえおくりて。まろふあぶとらぶも桂
之助のまこと布じげある女をえとぶ物あまなり。あび悲む打まをそ
まぐりハ詞もなるまじらぐ。桂之助ふひひ。あをま君ふあのせまあじまる
かん方あり。いさこまるふそ。奥深くともるこたる一間のうちふつさむら
られ何人ふあひゆるままふと。のちくの巻を讀得てまらん

○雍州府志曰梅津清景の塔梅津邑のあり。清景ハ藤原惟隆
十八世の孫也代々院の北面なり。禪法ハ飯一。剃髪して日瓦心と
号まを。案多ハ一説是球ゆれり是るるをまふと。此考ハ卷之
第四回の下下記とせんと。誤てゆじゆゆ。此ハ記せし。彼処と
てしえらるらし

夫ハさておれ爰ハ又名護屋山三郎元春ハつと桂之助つと前月若
等三人のちふとたぐねて。その安否をこひ。つとハ父の仇不破伴左衛
門をたぐねて宿意をさげぐ。心ハ二ツ分ハつちがみ心をこむ死は。
僕麻糸と具て。処方こそ尋あつた。あつとく旅中ハ月日をおくり
けらぐ。一夜旅店のうちハ不思議の夢をえとる。その林夕いふとちあぶ。
此ハも盃蘭盆の時めて父の亡霊をまらふと。と香華灯燭とをたえ
為樹ハ出けり。民家一草ハ霊棚をまらけ。庭火をたれて亡霊を迎る。
念仏の声念珠の音樹ハこら。あゆまの亡者もはとひ来て。あがきあぐ
あつとこちあふ家ハふが為体。誠ハ哀のあつとさぬなり。亡者のまこと
さかぐめて。額ハ波をたふらる。あゆまのあゆま。腰ハ弓を張たる。焼もあを
若男の幼子の手をひくもあり。若女の乳あつとをる。あゆまのあゆま。懐ハ

あつてもあつても雨露もさうねたる骨のほぐれ男も女も口ぢぢぬ
たる影もひとさへ薄くええと浪と踏ここの由もまゝあひく年より
亡者や頬鬚生まけりといとあひく男の身も肉脱もせきなる
しくええそのあけの亡者あんな白髪を乱せる姥の亡者庭火の
かげふらぶひらるあの子の顔をほのぞれんとさうぐこある孫の
心の残りほろろ白界ひびく口由にてと醜男の亡者むひ火たく女は
ほろろとあつりてさうぐけお立たる後の夫とむらなる恨とあひ
かゝるあぐの亡者蜂のごとく小群蟻のごとく小集まれども家々の
男女の目あつ少もえつがる様子有ぬ山三郎おのれも命あつて
亡者の数小入りつと一度はかどろれ蜂の一期朝露の命泡沫
死常老少不定の世のあひ皆あぐのごとく一度の歎きとてた

ける所小背後の方小山三郎くとよぶ声虫のなく音小異なり山三
郎外をひらぎへてさうねたる正しく亡父三郎左衛門のあひら
おどろけつ平伏して礼をほ世を去る親人小又あふ世の不思議
さうとつて三郎左衛門のあひけら汝我仇をむくりんと身を苦しめ
るひを尽すとを苔の下を不便ふるひこれまをめらふあひら
汝伴左衛門をめるとめんとあるが他をもむら死益ありとや京都
小立起あぢぢ幼年の時あひらけつる女をたぐぬて相まへり
おののく伴左衛門あぢぢのあひらけらばまを告ん為小まををま
ぞ親子の一世のあぢぢりあぢぢ再まらるまを得たにといひと
さうんとよる袖小さうりせめて今まままちむらとといふと
林々りて旅店の宿所小只独憫然に居りけるが五更の鐘小

おどろかすて。やうく。禁方あつて。と。暁し。悲歎小袖を志むりけり。かて
 山三郎父の生口まうせ。いと。元京都に立越て。小幡の里ふあやぶげ有
 家を。くら。麻糸めらも住ける。びさしく。株中ふありて。少くの
 たくづも。皆めらひ。素も。ありひ。ある。が。持合せた。は
 衣服のたぐひも。おやく。ふ。賣。及。て。比の。は。ふ。は。至極。價
 き。じ。あ。れ。も。麻。糸。忠。義。の。心。あ。り。者。あ。る。日。毎。日。頭。ト。物。成
 賣。ふ。出。て。才。体。の。瘦。り。も。も。い。と。い。ど。や。う。く。の。け。さ。煙。を。ど
 立。け

○案。ふ。前。頭。ト。物。賣。古。賣。也。文明の比の職人。及の。うち。ふ。又。也
 又。能。狂。言。ふ。せん。ト。物。賣。と。ふ。ゆ。薬。を。煎。ト。て。ある。ひ。賣。と。う
 者。と。ぞ

六花柳の鞘當

其頃。都。五。條。坂。小。妓。樓。あ。り。と。原。此。所。ハ。平。家。の。侍。大。將。悪。七。兵。衛。景。清
 が。妾。阿。古。屋。が。住。一。処。と。ぞ。その。ある。ゆ。ゆ。あ。る。この。阿。曾。比。ゆ。て。秦。樓。の
 柳。絮。常。小。浪。子。の。心。を。牽。楚。館。の。舞。華。能。富。翁。の。産。を。湯。と。
 これ。賢。と。なり。愚。と。なり。貴。と。なり。賤。と。なり。此。娼。境。小。迷。来。者。む。さ
 も。さ。ら。と。む。恰。も。蝦。蟄。の。井。み。お。ら。ひ。つ。ご。と。く。飛。蝶。の。灯。み。集。る。ふ。似。たり。
 あ。る。この。人。の。ほ。ど。つ。ら。ち。ふ。一。目。だ。ら。た。る。打。拵。の。侍。あ。り。春。雨。不。息。子
 の。飛。か。み。さ。め。を。摺。て。三。本。傘。の。麻。子。紋。つ。け。た。る。小。袖。を。着。し。白。柄。の。大。小。を
 掴。差。小。さ。ら。し。洲。の。与。三。あ。ら。り。製。し。けん。手。以。た。め。たり。時。絵。の。一。ツ。印。は。龜
 を。お。び。深。編。笠。を。す。ぶ。ふ。さ。て。絡。つ。け。の。緒。を。つ。け。た。る。板。金。剛。を。た。り
 あ。ひ。し。つ。東。を。の。ぞ。と。と。と。又。西。の方。より。羽。織。小。袖。も。一。様。小。村

各古屋書之五十二

七

だり雲小箱妻の閃きたり形をまきせたる釘線入たる袖がらひひけて
うまふ着るす。そらひの敷函の大小を園の木におび目せし笠の下み懐
紙の覆面かけ。肩を首より高くはしりて六方めがらみ手を打ち
る大路せぬと歩み来る侍あり。已ふ兩人由れちびひける時三本傘の
紋付けたるともこの侍ありてめがらこの侍の刀の鞘み鞘とほしと打
めけてけるが雲小箱妻の侍。ともこの端をまきとあざり。臂をわりのとて
怒れり体なり。ともその手みおひのけせるとまき。めがらみたる様
臂を伸して引るむ。たがひお口お一言をいふとといどもつひお刀を技は
て丁と志と打あひけぬ。群集の諸人られをうて。この誼譚よとさハ
ま立。東西南散乱して。ひる大路み只兩人うけ。あざしつ。斬むとと
いども。兩人の猛死勢ふおととして。誼ひとととれをさむむる者ありけり。

時ふは曲中第一の名妓とよなり。その名在ふからとるは神林通順
めしみの葛城といふあまのむすめ。離のうらまると此体をえて。いそげしく裾ふ
まると出来り。いとあやうげなる剣の下をぐるると。兩人のなぐとて
あまの鳥の囀出たるがどれ声しそひひけぬ。おん二方をもおはりけり
おん方と見えぬふ所ともささひむむむ。又傷おあびあぬ。おん
たがひあやめぬ。宿恨のあやめぬとささむ。は誼譚の妻ふむ
かりて。双方ともおん刀をささめたむむむと。笑敷つくとささめけり。
兩人の昔葛城が理ある詞を耻けん。おん音々あまをけん。ひとしくおんあつ
つ。刀を撃おあやめて。衣服の塵を打払ひ雲小箱妻の侍ハ出口の方
へつれぬ。三本傘の侍も退りぬにたるを葛城袖をさりとささむ。と
さめ。かこの編笠茶屋みめをゆたて。あじの女ふさし。ていしてささむ。

京五條坂の
曲中おあつて
鞠當誼譚
の圖



つらみ

所^{ところ}からこそ物^{もの}馴^なれた女^めもねば。物^{もの}語^ご一^{いつ}巻^{まき}といひて出^でたわ。あどあて
 別^{わか}れ人^{ひと}もあけねば。昔^{むかし}日^ひ城^{しろ}かの侍^{さむらい}小^こむらひ卒^そ尔^にありとつども。さし度^{たぎ}吉^{きち}又^{また}
 のちんぶら。妻^{つま}へ葛^{くわ}城^{じやう}とPをあそびるる。ちんぶ三^{さん}本^{ほん}傘^{かさ}の紋^{もん}つけむふふ。
 若^{わか}名^な古^こ屋^や山^{さん}三^{さん}郎^{らう}どのあへあふむとつふ。かの侍^{さむらい}打^{うち}開^{ひら}てさそへ同^{どう}おびるる。
 葛^{くわ}城^{じやう}どのあふら。おこと山^{さん}三^{さん}郎^{らう}小^こ何^{なに}の所^{ところ}縁^{えん}ありそたぐなるや。推^{おし}量^{りやう}の
 ごとく某^{たが}山^{さん}三^{さん}郎^{らう}ありそて編^あ笠^{がさ}をそねば。昔^{むかし}日^ひ城^{しろ}城^{じやう}をすれくとおまより
 幼^{わらわ}時^{とき}のうれをどとも面^{おも}へあふとえおあへね。姓^{せい}名^なへおほじおん方^{かた}ありれども。
 ちんぶら妻^{つま}がたぐなる人^{ひと}あふあふと。疎^そ忽^{とつ}のなんへおほじあね妻^{つま}へ大^{だい}和^わの
 國^{くに}佐^さ木^きの家^{いえ}臣^{おん}名^な古^こ屋^や三^{さん}郎^{らう}左^さ侍^{さむらい}門^{かど}どの子^こ息^{いき}山^{さん}三^{さん}郎^{らう}どのと。あさあき
 時^{とき}のひちぢけの殿^{との}あふ。たぐねんなるあふそてあいなけふふへけと。は
 かの侍^{さむらい}眉^{まゆ}をまへ。あふのちあふちんぶら。和^わ州^{しゅう}子^こ守^し町^{まち}の浪^{なみ}人^{ひと}高^{たか}間^ま久^く来^{きた}
 右^{みぎ}侍^{さむらい}門^{かど}どの息^{いき}女^めあて。幼^{わらわ}名^なを岩^{いわ}橋^{はし}のいんぶらとつふ。葛^{くわ}城^{じやう}おどあねい
 めそちんぶら。妻^{つま}がたぐねん。あふをよとあふあふとつふ。あふぞかの侍^{さむらい}掌^て
 をんこと打^{うち}誠^{まこと}小^こ不^ふ思^し議^ぎの出^で会^{かい}あり。今^{いま}何^{なに}をうけつとめつた某^{たが}あふ
 承^{うけ}のたぐ子^こあふ佐^さ木^きの家^{いえ}臣^{おん}名^な古^こ屋^や三^{さん}郎^{らう}左^さ侍^{さむらい}門^{かど}正^{まさ}春^{はる}この僕^{やく}麻^あ花^{はな}こ
 中^{ちゆう}と者^{もの}あり。あね山^{さん}三^{さん}郎^{らう}この幼^{わらわ}年^{ねん}の時^{とき}のひちぢけの女^め子^こありとつふ。い
 ちんぶらあてありけら。某^{たが}あふ侍^{さむらい}あて。今^{いま}世^よも此^{この}曲^{まが}中^{ちゆう}へ来^{きた}り。あふいられ
 あふあきあり。先^{せん}年^{ねん}主^{しゆ}君^{きみ}三^{さん}郎^{らう}左^さ侍^{さむらい}門^{かど}殿^{との}佐^さ木^きの家^{いえ}の執^{しやく}権^{けん}不^ふ破^ぱ道^{だう}
 犬^{いぬ}が児^こ子^こ伴^{ばん}左^さ侍^{さむらい}門^{かど}が為^{ため}に闇^{やみ}打^{うち}あひあひ。その夜^よちん館^{くわん}の騷^{さわ}動^{どう}に
 うらうら山^{さん}三^{さん}郎^{らう}の浪^{なみ}の承^{うけ}とありあひ。敵^{てき}伴^{ばん}左^さ侍^{さむらい}門^{かど}がわらふと。あふい
 ため所^{ところ}くあぐをわらう。旅^{たび}路^ぢ小^こ月^{つき}日^ひをすけりあひ。が道^{みち}ぞら当^{とう}国^{こく}小^こ幡^{ばん}れ
 里^{さと}小^こ幡^{ばん}住^{すま}むい某^{たが}もその所^{ところ}に仕^{つか}へ。あふと。あふい。頃^{ころ}日^ひ人の噂^{うわさ}を同^{どう}

右^{みぎ}侍^{さむらい}門^{かど}どの息^{いき}女^めあて。幼^{わらわ}名^なを岩^{いわ}橋^{はし}のいんぶらとつふ。葛^{くわ}城^{じやう}おどあねい
 めそちんぶら。妻^{つま}がたぐねん。あふをよとあふあふとつふ。あふぞかの侍^{さむらい}掌^て
 をんこと打^{うち}誠^{まこと}小^こ不^ふ思^し議^ぎの出^で会^{かい}あり。今^{いま}何^{なに}をうけつとめつた某^{たが}あふ
 承^{うけ}のたぐ子^こあふ佐^さ木^きの家^{いえ}臣^{おん}名^な古^こ屋^や三^{さん}郎^{らう}左^さ侍^{さむらい}門^{かど}正^{まさ}春^{はる}この僕^{やく}麻^あ花^{はな}こ
 中^{ちゆう}と者^{もの}あり。あね山^{さん}三^{さん}郎^{らう}この幼^{わらわ}年^{ねん}の時^{とき}のひちぢけの女^め子^こありとつふ。い
 ちんぶらあてありけら。某^{たが}あふ侍^{さむらい}あて。今^{いま}世^よも此^{この}曲^{まが}中^{ちゆう}へ来^{きた}り。あふいられ
 あふあきあり。先^{せん}年^{ねん}主^{しゆ}君^{きみ}三^{さん}郎^{らう}左^さ侍^{さむらい}門^{かど}殿^{との}佐^さ木^きの家^{いえ}の執^{しやく}権^{けん}不^ふ破^ぱ道^{だう}
 犬^{いぬ}が児^こ子^こ伴^{ばん}左^さ侍^{さむらい}門^{かど}が為^{ため}に闇^{やみ}打^{うち}あひあひ。その夜^よちん館^{くわん}の騷^{さわ}動^{どう}に
 うらうら山^{さん}三^{さん}郎^{らう}の浪^{なみ}の承^{うけ}とありあひ。敵^{てき}伴^{ばん}左^さ侍^{さむらい}門^{かど}がわらふと。あふい
 ため所^{ところ}くあぐをわらう。旅^{たび}路^ぢ小^こ月^{つき}日^ひをすけりあひ。が道^{みち}ぞら当^{とう}国^{こく}小^こ幡^{ばん}れ
 里^{さと}小^こ幡^{ばん}住^{すま}むい某^{たが}もその所^{ところ}に仕^{つか}へ。あふと。あふい。頃^{ころ}日^ひ人の噂^{うわさ}を同^{どう}

伴左衛門雲小指妻の模様はけちを衣服を着しては曲中へ往来
まはしはつと敵とわたりつるを以て人の又知たる衣服を着てあも
人立ちおちた所を徘徊するのあらうとてかみらくの假人あて山三郎との
をばやしとてあつておちまはれ謀計こそはしゆ其持傳へる一腰
を代り主人の紋有人の又知りな侍衣服をうへてかきたる男
のさゆふ打拾山三郎ぶみとてえせてけしもは処へまりけ侍折下りの侍お
ぬたあひつと鞆当として誼華を仕うけあろろふゆと始終のしよ
深編笠あまの面へまるとええざれども身のまゝに恰好保して伴左衛
門ふあぶと小指の光をえねれば伴左衛門が腹心の傍輩大上雁八といふ
者疑はしとてつとて葛城の涙をながし山三郎どのい妻七才の時おち
のさしをうけてげいぢぢはる夫たりぬけ川竹の才となりてもは

時も忘るひぬあくせめては一目相見んとはぬれひけしども筆
向う鳥の牙なりぬげせんまぶらぐむほしく月日をおろまけりそのうち
又うへを打とあひてその牙もさくへ志とてかりあひて何と急殊更
かすはく何とそ一度めどもおふまはもかかると神仏祈てあけられ
只そのまのまをねがひねけしもまらうとておん牙あひひの身と縁の尽さる
所かりとひひて或はあましく或は喜びその牙親の貧苦をえらふ忍びと
ふのうは曲中お牙を賣たるはじめ終をうらふおのりか侍賤牙と
かりて都合さ家も打りておせかれども妻が心の実をうけく苦まこ
へてせめて一目あひ見るまをゆかりと涙かろふおのり
ふどもけしは麻花もその志の実を感して共お袖を志むりぬ葛城
又ひけりぬけは伴左衛門といふ妻同の今がはじめかりさきさきやどの侍

山城の国
小幡の里
山三郎
貧家の
光景



のこと深漏笠み敷かきし雲不稻妻の衣服着たる侍五人一
 様小打拵て項日影の傍ぐ此曲中小往來とどのうち一人ハキこと
 伴左衛門おまへしといひ麻糸を引五人の者一人ハ伴左衛門を
 残る四人ハ深層三平笹野蟹蓑土手泥助犬上雁八といふ者不疑
 内は皆助太刀しと三郎左衛門どのを打ちたる者ども之正是天の
 ありとまぢび壁小耳あり垣小ゆひりありといひ此所まで長物語ハ
 あしつらん。つらねて又相まゝ人々えといひて立上り葛城袖小
 了今ゆひしこととておのむとありけしは麻糸くちるが兒又編笠小
 敷かきして出ゆけは葛城ハ神林が家ふりつるぬ

卷之五上冊終

